
あの日の夏の約束 ～小学生編～

川大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日の夏の約束 ～小学生編～

【Nコード】

N6273C

【作者名】

川大

【あらすじ】

少年と少女はあの日の夏に約束をした。少年は約束を果たすために一生懸命練習をする。少女は約束を果たしてもらったために一生懸命応援をする。

ブローグ

「おりゃ！」

少年は壁に向かってボールを投げる
その綺麗なフォームから投げられるボールは中々速かった

「よし！ これで……三振だ！」

また、壁に向かってボールが投げられる
ポーンとボール跳ね返ってきて

「ねえ、まだ帰らないの？」

少女が少年に声をかける

少女が声をかけるのも無理はない、もう夕日が沈みかけているのだ
から……

「ただだよ、もっと練習しないと大きくなってから、甲子園に行けないからな！」

少年は少女の提案を無視してボールを投げ続ける

「もう！ 甲子園、甲子園ってそんなに行きたいの？」

少女は怒りながら少年に聞いた

「おうつ！ 甲子園に行くことが俺の夢だからな！」

質問に答えながらもとても速いストレート投げる

「だったら、今度の日曜日におじさんに連れってもらえばいいじゃん！」

「はあ、そんなんじゃないよ！ 大きくなって選手として甲子園のマウンドに立って

投げることに意味があるんだから」

少年はボールを投げるのをやめ、少女に抗議をする

「えっ？ そうなの？」

少女は驚き、顔を横に傾けながら、また質問をした

「大きくなってからっていつなの？」

少年は胸を張りながら言う

「高校生だよ！……って、この前テレビでやってるのを一緒に見たじゃん！」

先日のテレビの高校野球中継を見ていたようだ

「へえ、あれが甲子園だったんだ」

少女は何も知らないまま見ていたようだ
そんな少女に少年はあきれていた

「はあ、お前何も知らないまま見てたのかよ……」

「へへっ〜」

少女は苦笑いをしながら少年の顔を見る

「まあ、いいや……とにかく、俺は甲子園に行くんだ!」

少年は気合を入れて叫んだ

少女はそんな少年にあることを約束させようとした

「うっん……甲子園に行くだけじゃ寂しいから私を甲子園に連れて行くって

いうのを約束しよ!」

「約束?」

「そお! 君が甲子園に行くってだけじゃつまんないし、寂しいから私も甲子園に

連れてって!」

「まあ、それぐらいの約束してやってもいいぞ」

「ホント! ヤッタ〜じゃあ、指きりしよ!」

少女ははしゃぎながら少年の小指と自分の小指を絡める

「「ゆ〜びき〜りげ〜んまんうそついたらは〜りせんぼんの〜ますゆびきった!」」

「へへっ〜約束ちゃんと守ってよ。あつ、あと、約束守ってくれた

ら、私の恋人にしてあげる！」

少女は顔を赤くしながら少年に言った。

「こつ、恋人！？ まあ、それはいいとして必ずお前を甲子園に連れて俺のかつこいい活躍を見せてやる！！」

少年も顔を赤くしながら宣言。

「うん！ 約束だからね！」

少年と少女はあの日の夏に約束をした……………

プロローグ（後書き）

初めまして川大です！

小説は書くのが苦手ですけど皆さんに面白いといってもらえるような作品をつくっていきますのでよろしくお願いします！

第1話：新学期の始まり

陽気な天気で桜が舞う季節の4月、1人の少年が走っていた。

「遅刻っ！ 遅刻っっっ！！」

新学期の朝早くから道路を走っている、俺は椿野 晃^{つばきの あきら}ピチピチの新小学5年生だ。好きな食べ物は肉！肉！！肉！！ 嫌いな食べ物^{もの}は梅干し。これだけ

はホント食べられない…… 性格は…… 普通？ うむ…… 普通だ！
そう信じよう！！

あと、趣味というか大好きなことは野球！！ これは外せないな、うん。

って、こんな余裕こいて自己紹介してる場合じゃない！ 早く学校に向かわねば！

ダーッシューー

「ハア、ハア…… なんとか…… 間に合った…… ふう」

自分のクラスに入り席に座る。おっと、学校の紹介がまだだった、ここは静岡にある夕陽丘^{ゆうひがおか}小学校、丘の上にある学校で夕日が綺麗に見えるからその名がついたようだ。そして、今俺がいるクラスが5年3組のクラスだ。

俺が学校紹介しているとところに顔見知りの女の子が来た。

「まあ、遅いよ。今日から、5年生でしょ。しつかりしなきゃ！」

と、説教してくる顔見知りひよりは日和ちなつ 千夏。俺の腐れ縁の奴だ。

まあ、俗に言う幼馴染だ。こいつとは1年前の夏にある約束をした。まあ、その話はまた後で

「しょうがないだろ、今日は父さんも母さんも、仕事で朝早くに家を出ていったんだから」

そう、俺の両親はバリバリの仕事人間で年がら年中働いているのである。

でも、大事なイベントの時などは仕事を休んで家族で過ごすいい両親だ。

いつもは、俺が学校に行く時間に両親も出勤するのだが、今日に限って朝早くから

仕事が入り、起こしてもらえなかったのだ。

「はあ、ホントにあきちゃんあきちゃんは朝、起きれないよね。やっぱり、起こしに行つてあげようか？」

「いや、それはさすがに遠慮させてもらう。あと、あきちゃんあきちゃんって呼ぶな！」

千夏に起こしてもらうのは命がいくつあっても足りないくらいだ。前に一度起こしてもらった時は

本当に死ぬかと思った。……思い出しただけでも冷や汗が出てくる……。

そして、あろうことか千夏は俺のことを「あきちゃん」と呼ぶ。小さい頃から呼ばれていたのだが、流石に小学5年生ともなれば恥ずかしいものである。しかし、こい

つは恥ずかしがるどころか、
積極的に呼んでくるのである。困った奴だ。

「ははっ、また、寝坊ですか晃？」

と、敬語で話しかけてくる男子は都築 翔太。さわやか系のナイス
ガイで、

女子にモテまくる野郎だ。こいつとは、近所の少年野球チームの夕
陽丘バスターズでバッテリーを
組んでいる。あっ、俺がピッチャーで翔太はキャッチャーだ。

「そうなんだよ、あきちゃんがまた、寝坊したんだよ。都築君も
何か言っただけよ」

「ふむ、それはいけませんね。晃、やはり、日和さんに起こしても
らうのはどうですか？」

「それだけは絶対に嫌だ。翔太、前にも言っただろ千夏の起こし方は
命がいくつ当てでも足り
ないって、お前が起こされてみるか？」

「……………そうですね。やめておきましょう。僕もあの方法はご勘
弁願いたいです。」

「えー、そんなに酷くないよ。あきちゃんの 〇〇 を突つ
「やめてー、言わないで

ー」……………わかったよ、もう、あの方法で起こさないよ」

ありがとございます。千夏さん。

「さて、そろそろ始業式が始まるので、体育館に行きましょうか」

「うん、そうだね。ほらっ、行くよ。あきちゃん！」

「はあ、だるいけど行かないとな……」

教室を出て3人は体育館へと向かった。

始業式終了後……

「はあ、やっぱりあの校長の話は長すぎる……」

「ハハッ……まあ、しょうがないよ。校長先生、話すこと大好きだから」

「でも、今日は後、担任の先生の連絡で終わりですから、もう少し頑張らしよう」

「そうだな！ 翔太、学校終わった後練習ってあったけ？」

「はい、ありますよ。昼食食べ終わったら後ですから、午後2時からですね」

「よっしゃ！ 今日気合を入れてやるぞ！」

今日もたくさん投げてやるぞ〜

「晃。今、今日もたくさん投げるって思いましたよね」

ビクッ！！

「ソ、ソナコトナイヨ」

「はあ〜、練習熱心なのはいいですけど、オーバーワークは禁物ですよ。まだ、小学生

なんですから焦らないで練習しましょう。肩を壊してからでは遅いんですから」

「わ、わかってるよ。無理はしない」

何でこいつは人の心を読むことができるんだ……。ハッ！　もしかして、翔太は超能力者だったのか！

「ちなみに、僕は超能力者ではありませんよ」

なぜ！？　なぜ！？　わかるの！？

「はいはい、2人ともふざけてないで先生が来たから、席に着席しよ」

「お〜い、お前ら席に着けよ。ホームルーム始めるぞ」

そんなこんなで今日の学校は終わった……

第1話：新学期の始まり（後書き）

やっと一話目が書き終わりました……。この調子でバンバン更新していきたいと思います！感想などもお待ちしております！

第2話：夕陽丘バスターズ

「よっしゃー、練習だ！」

学校が終わった後、昼食を食べた俺は少年野球の練習があるため、夕陽丘小学校のグラウンドに向かっていた。

俺の所属している、少年野球チームの名前は夕陽丘バスターズ。去年出来たばかりの新しい

軟式野球少年団だ。小学3年生までお遊び程度で俺は野球をやっていたのだが、3年生の夏に見た高校野球にすっかりはまってしまい、4年生になって本格的に野球をやりたいと思ったのだが、近くに野球チームがなかったため、一緒に野球して遊んでいた翔太を誘いチームを作ることにした。

しかし、小学生だけでは出来なかったことなので、野球に詳しい翔太の父さんにチームの監督を

やってもらうように頼んだところ、快く引き受けてくれるところがおじさんは張り切ってしまい、

「目標は日本一だ！」と言って燃えてしまった。

チームを作った後は、メンバー集めだったのだが……本当に苦労した。間違えた……しているだ。

チーム結成から1年経ったのだが、人数は未だに8人である。だから、去年は公式戦の大会はおろか

練習試合もできなかった。当然、今年は試合を……と言いたいところだが、さっきも言ったとおり、メンバーは未だ集まらず。

「はあ、早くメンバー集めないとな……」

あと、1人なんだけどな……。そのあと1人が集まらない。困ったものだ。

そんなことを考えているうちに学校に着いた。

学校にはすでに都築親子がいた。

「ハアーハツハツハハ！　こんにちはだ！　晃よ！！」

バン！　バン！　と、俺の背中を叩いて豪快な挨拶をしてきた、この人が翔太の父、都築　益次郎さんである。ますじろう190cmを超える大柄な体格で、豪快な性格が特徴の人物だ。

「痛いっ！　痛いですよ！　監督！」

「ガーハツハツ！　これくらいで、嘆いているようではまだまだだな！！」

自分の体格を考えてやってくれ……。痛すぎるよ、トホホ……。と、痛がっているところに

「こんにちは。晃」

翔太が話しかけてきた。

「翔太あゝ、監督をなんとかしてくれよあゝ」

「すみません。僕では絶対に父さんは止められませんから、諦めてください」

につこりとさわやかな笑顔で断られてしまった。

まあ、あのおじさんだからな……

そうしているうちに、そろそろと他のメンバーもやった来た。その中の一人が声をかけてきた。

「よお。晃、翔太」

「あつ！ たつちゃん、ヤッホー」

「村重さん。こんにちは」

この人は俺の1つ年上の小学六年生、むらしげ村重 たいが大我。
六年生で身長が170cm近い大柄な体格でチームの四番だ。
ポジションはファーストである。ちなみにキャプテン。

おちゃらけた性格というか、静岡で生まれて、育ったのにエセ関西弁をしゃべる変わった人物だ。

去年、チームメイトを募集しているときに1番最初にチームメイトになった。

「あいかわらず、晃は元気で翔太は丁寧ちゅーかお堅い奴やなあ」

「人間元気が一番だからな！」

「フフッ……これが僕ですから」

「まあ、人それぞれやからなあ」

「そうや！ 昨日のプロ野球中継でな……」

「なになに」

「それなら、僕も見ました」

と、野球の話をしていると

「おーいつ！ お前ら、そろそろ練習始めるぞお！」

監督が大きな声で声をかけてきた。

「「「はーいつ！」「」「」

俺たちは監督の下へ駆け寄る。

「よーしっ！ まずはアップからな。大我、頼んだぞ」

「まかしとき！」

と、言つてたつちゃんがみんなをまとめる。

「ランニングやるから、整列！」

みんなは2列に並ぶ。

「よっしゃ！ みんな、行くでえ！」

「「「オーツ！！」「」「」

みんなが気合を入れて返事をする。

この後、ランニングをやり、柔軟、ダッシュなどをやった。

「監督うゝ、アップ終わりました！」

たっちゃん監督に報告をしに行くと、監督が指示を出す。

「よしっ！今日はノックからやるぞ。晃と翔太はピッチング練習
！」

「」「」「はい！」「」「」

こうして新学期最初の練習が始まった。

第2話：夕陽丘バスターズ（後書き）

やっぱ、小説書くのは疲れますね……
でも、がんばっていきます！！

第3話：綺麗なフォームですね

バンツッ!!

気持ちのいい音がミットから響く。
俺は今ピッチング練習中だ。

「ナイスボールです。晃」

「へへっ、今日も絶好調だぜ」

と言いながら、次の投球に移る。

バンツッ!!

小学生とは思えない速球がまたミットに収まる。

（つう〜!! あいかわらずすごい速球ですね。110後半から
120キロは確実に

出ています。本当、小学生の球じゃないですよ……。しかし、晃
はきれいなフォームで

投げますね。ワンインドアップから投げられる彼の美しいフォー
ムは全国の投手の

お手本と言っているほどだ。それに加え、恵まれた体のつくりで
ある。晃は柔軟でムチ

のようにしなる腕、がっちりとした足腰、本当に天性の賜物であ
る。

晃の才能がうらやましいです……）

「おーいっ！ どうしたんだ？ 早くボール返せよ」

ボーっとしている翔太に声を掛ける。
何やってんだ翔太？

（おっと……。僕としたことが考えすぎましたね）

「はい。すみません、ちょっと考え事しました」

「珍しいな。翔太が練習中に考え事なんて」

「いえ、あいかわらずすごい速球を投げるんだなと思ひまして」

ニツコリと笑いながらボールを返す。

「そうか？ 俺はそんな風に感じないけどな」

うーん……。周りに比較する奴もいないし、第一に他の小学生のピッチングを見たことないから自分がすごいなんて思ったこともない。まあ、テレビでやってる野球中継のプロ野球選手とは月とスッポンの差だとは感じる。

「晃はすごいですよ。晃がいれば全国大会も夢ではないです」

「へへっ……。ありがと」

晃は指で鼻をかきながら照れた。

「よし！ 翔太にほめてもらったところで練習を再開するか！」

晃は気合を入れなおし、ピッチング練習を再開する。

「そうですね」

きれいな青空の下、再び気持ちいいミットの音が響く。

第4話：あたしが入るうか？

キーンコォーンカーンコーン

「よしっ！ 今日の授業はここまで。そのまま、SHRをやるぞ。
……連絡事項なし。気を付けて帰れよ。それじゃあ、解散！」

担任の先生が号令を掛けて、今日の学校が終わった。

「あーっ！ やっと、終わったー！」

晃は体を伸ばしながら、リラックスをした。

「あきちゃん、帰ろっ」

千夏が晃の席に近づきながら、声を掛ける。

「そうだな……。翔太、帰ろっぜ」

「はい。わかりました」

そうして、すぐに帰りの支度を始めた。

「あっ！ あきちゃん、今日は用事があって途中までしか帰れないんだ」

「うん？ そうなのか？ それじゃあ、しかたないな」

「うん、ごめんね」

胸の前で手を合わせながら、かわいく謝ってきた。

「まあ、気にするな」

千夏のかawaiiポーズをまったく気にしない晃であった。

（うつゝ、こんなかわいいポーズをしてるのに何で気にしないのよ！）

憐れな千夏であった。

「晃、日和さん。帰り支度が終わりましたので、行きましょう」

そうしている内に帰りの支度を終えた、翔太が声を掛けてきた。

3人で下駄箱を出て、校門前に差しかった時、校門前には翔太の父さんがいた。

「ハーハッハッ！ 3人とも今日も1日お疲れ！」

「あれ？ 父さんどうしたんですか？」

当然の疑問だ。監督はまだ仕事の時間なのに小学校にいるのだから。

「うむ、今日は仕事が早く終わってな、それでたまには家族で外食をしようと思ってるな！」

なんとまあ、いい親父さんじゃないか。家族のことを第一に考える……泣けるねえ。」

「わかりました。……晃、日和さん。申し訳ありませんが僕はここで……」

困った顔をしながら、俺たちに言ってきた。

「いや、気にするな。家族でおもいきり楽しんで来い！」

「そうだよ。家族水入らずってね」

俺と千夏は笑顔で翔太に言った。

「ありがとうございます。では、ここでさようなら。晃、日和さん」

さわやかに挨拶をして親父さんと帰っていった。

「あたし達も帰ろっか」

（やった〜。あきちゃんと2人つきり！）

「おっつ！」

俺と千夏は下校の真っ最中。

「まだ、チームの人数が集まってないんだよね？」

「はあ、そうなんだよな……。あと1人なんだけど……。そのあと1人が集まらないんだ」

そう、新学年が始まってから3週間。あと1人のメンバーがまったく集まらない。

深刻な問題だ。夏の大会まで、あと2ヶ月ちよつと、今年こそは大会に出たい。

「あきちゃん……。なんだったら、あたしが……。入ろうか？」

（チームに入れば、あきちゃんと一緒にいる時間が増える！）

「えっ！？ いやいや、お前野球できないだろ」

千夏の奴、なに考えてるんだ？ まったく、野球できないのに？ あっ、そうか！ 野球に興味をもったんだな！ うんうん、いい事だ。

「そうか！ 千夏、やっと野球に興味をもって、チームに入ろうって決めたんだな！」

「えっ！！ いや……。そうじゃないんだけど……」

(うっ、あきちゃんと一緒にいたいから入りたいとは言えないよ)

「ありゃ、違うのか？　じゃあ、何で？」

「えっ、え〜とね……。あ〜っと……。う〜んと……。……………」

「うん？　どうした？」

何だ？　千夏、急に黙ったりして。

「や、やっぱ、チームに入るのやめるね。あっ、あたし、ここまでだから！」

「あっ、ああ」

千夏はチームに入るのをやめると言い、去っていくとする。

「お、おい、千夏」

「バイバイ〜。あきちゃん！」

さっそうと帰っていった。

「何なんだ、あいつ……………」

よくわからない千夏であった。

千夏と別れた俺はメンバー集めについて再び考えていた。

「うーん……。ホント、あと1人なんだよな……」

と、悩んでいて、空き地を通ろうとした時……

スパーン！

何か音が聞こえてきた。

「うん……この音は？」

音は空き地の方からする。

「……行ってみるか」

俺は空き地へと向かった。

第5話：9人目！？

晃が空き地に到着した。

「うーん……。この空き地から音がしたよな……？」

俺が空き地の周りを探していると……。

「えっ……」

手にグローブをつけ、壁に向かってボールを投げている少女を見つけた。

ビュッ！ スパァーン！

腰まである綺麗な黒い髪をなびかせ、鋭い腕の振りでボールを投げる少女の姿は本当に綺麗だと思った。

「すごい……」

俺がそう声を出すと、少女は俺の声に気づいたのかボールを投げるのをやめてこちらを向き、声を掛けてきた。

「何か用か？」

「えっ……！ あっ、あの、その……」

急に声を掛けられたので、俺は何を答えて言いのわからなかった。

「もう1度言う。何か用か？」

少女は再度聞いてきた。

「あ、ああ。ボールの音がしてここに来てみたら、君が綺麗なフォームでボールを投げていたから、おもわず見惚れていたんだ」

少女の意志の強そうな瞳で見られたためか、自分の心の中が全部見られてしまうと思ったので、嘘もつけなく正直に答えてしまった。

「むっ……、そ、そうか」

少女は頬を赤く染め、黙ってしまった。
今度は少女が答えられなくなってしまった。

そんな少女に俺は聞く。

「野球やってるのか？」

「ああ、やっている……というかお遊び程度だ」

元の頬の色に戻った少女はそう答えた。

「遊び？ チームには入ってないのか？」

「入っていない。近くにチームはないし、仮にあったとしても……」

「しても？」

少女は寂しい顔をしながら、続きを答えた。

「私みたいな女子をチームに入れることはない……」

「……………」

「前に遠くにあるチームに入りたいとお願いしに言ったのだが、チームの監督にお前みたいな女に野球ができるかと言われ、断られてしまった」

無理やり笑顔を作り、俺に話してくる。

俺は言葉を失うと同時に怒りが湧き上がった。

なぜ、こんなにも野球が好きな子が女というだけで野球ができなくなってしまうのか？

俺はこの子に何かしてやれないのか？

「それに私みたいな下手なやつが野球をやってもしょうがないのかもな……………」

俺はその言葉に過敏に反応した。

「そんなことない。君は全然下手じゃない」

「慰めはいい……………」

「慰めなんかじゃない!」

「っ!」

「あっ…………、ごめん……………」

おもわず大声を出してしまった。でも、さっき遠くから彼女のピッチングを見たけど、本当に彼女はすごい実力を持っていると思う。だから、俺は彼女にこんな提案をした。

「じゃあ、俺と勝負しないか？」

「……勝負？」

少女は首を横に傾けながら聞き返してきた。

「ああ、俺と君で一打席勝負するんだ。ちなみに君がピッチャーで俺がバッター」

「し、しかし……」

「だああー、うだうだ言っていないで勝負！」

「わ、わかった……」

有無を言わず、勝負させる。

俺は地面に落ちていた少女のバットを拾い左打席で構える。

「よーし！ いつでもいいぞー！」

「わかった」

「本気で勝負しろよ」

「ああ、勝負する以上、本気でやらせてもらっ」

さあーで、さっき見た限りでは結構早いストレートを投げてたよな。
まあ、でも1球目は様子を見るか。
少女はノーwindアップから投げてきた。

「打ってみろ！」

「おおっ！！」

俺は1球見逃したけど、とても速いストレートが内角低めギリギリにきた。

な、なんていうか打てない！？　こんな速いとは聞いてないよ！
で、でも、なんとか当てないとな。

「や、やばいな。これ……」

「どうした、少年？　怖気づいたか？」

余裕の発言をしてくる。さっきまでうじうじしてたくせに。

「少年って……。同年くらいに見えるのに」

「さあ、次いくぞ！」

ピュッ！

次は外角低目か！ でも、打てる！

カキン！！

ボールはバットには当たったが、ボールはキャッチャー方向に飛んでいった。

つまり、ファールだったのだ。

「くっそー、タイミングはばっちりだったのに！」

少女は驚いた顔をしていた。

「今の球を当てたのか？ 私にとっては最高のボールだったのに」

さあ、次の球は何だ？ 内角？ 外角？ それとも、1球外してくるか？

「さあ、次来い！」

「くっ！」

少女はノーwindアップから3球目を投げた！

ビュッ！

やっぱり、1球外してきたか！

晃は見逃そうとする。

しかし、球は晃の考えを嘲笑うかのようにボールゾーンからストライクゾーンに入ってきた。

「えっ！」

晃は球を見逃した。結果三振。

まったく、バットが振れなかった。それもそのはず、ストレートと同じスピードで変化してきたのだから。

「な、なんだ、今のボールは？」

「高速スライダーだ」

少女が晃の疑問に答える。

「こ、高速スライダー……」

「そうだ」

「.....」

「ん？　どうかしたか？」

晃はうつむいたまま、唸っている。それを不思議に思った、少女は晃の顔を覗き込もうとした瞬間……

「すつつつげええー！！！！！！」

いきなり大声を上げた。

「きゃああ！」

少女はびっくりしてしまい、尻餅もついてしまった。
それをまったく気にしない晃は少女に話し掛ける。

「すごいよ、君！！ あんなスライダーが投げれるなんて！ しかも、ストレートもなかなかいいし！」

「えっ、あ、ありがとう……」

急にたくさんほめられた少女は顔を真っ赤にしながらお礼を言った。

（こ、こんな風に言われたのは初めてだ。しかも、こんなに私のことを見てくれる人も始めてだし……。私、この男の子と一緒に野球がやってみたい……）

「そっだ！ 俺と一緒に野球やろうぜ！」

「えっ！」

俺はおもわず、その声を掛けていた。この少女と一緒に野球をやることが俺が唯一少女にしてやれることだと思ったから。

「俺の入っているチーム、夕陽丘バスターズに入ってくれ！」

「……………」

（私はこの男の子と一緒に野球をすれば私は変わる……。それに私は彼の事が……。迷うことはない！）

「ああ、一緒にやろうっ！」

少女の笑顔は本当に輝いていた。

「よっしゃー！……って、まだお互いの紹介もしてなかったな……。俺は晃、椿野 晃。君は？」

「私は宇佐美 瑠奈だ」

「これからよろしくな！ 瑠奈！」

「ああっ！ 晃！」

こうして夕陽丘バスターズに9人目のメンバーが集まった……

第5話：9人目！？（後書き）

感想や評価をしてけると執筆向上につながりますので皆様ご協力
お願いします。

舞台設定・人物設定

物語の舞台

静岡の風光市 ふうこう 夕陽丘町 ゆうひがおか という場所が物語の舞台。

夕陽丘町はほぼ静岡の中央部に位置する。

周りはほとんど田畑で隣町はいろいろと都市化として発達している。

時代設定

この小学生編では平成12年（2000年）が時代設定となっている。

人物設定

椿野 晃 つばきの あきら 10歳 小学5年 7月13日生まれ

左投左打 投手・外野 オーバースロー

この物語の主人公。少しお調子者で野球大好き少年。投げることが大好き。

小学4年のときに高校野球を見て本格的に野球をやり始めた。

恵まれた野球の才能を持ち、小学5年にして球速が120キロを計測する。

しかし、変化球が投げられず（監督に変化球を覚えるのを反対されたため）ストレート1本のみ。

バッティングも非凡な才能がある。

小学4年の夏に千夏を甲子園に連れて行くと約束する。

日和 千夏 ひより ちなつ 10歳 小学5年 8月3日生まれ

この物語のヒロイン。

主人公の幼馴染で家が近所。基本的にのんびりな性格で世話焼き。主人公のことが好きだけど告白できずにいる。

小学4年の夏に晃に甲子園へ連れてってもらうと約束する。この約束が果たされたら、彼女は主人公に告白するつもり。だから、千夏はこの約束をものすごく大事にしている。

宇佐美 瑠奈 うさみ るな 10歳 小学5年 1月12日生まれ

右投右打 投手・外野 オーバースロー

この物語のもう一人のヒロイン。

主人公とは空き地で出会う。ちよつと姉御肌な性格……かも？

主人公とは違う学区に住んでいるため、通っている学校は違う。空き地で出会った時、主人公に自分のピッチングをほめられ、チームメイトになる。

ストレートの速さは晃に及ばないが、それでも100後半から110キロのスピードが出る。

瑠奈の一番の武器はストレートとほぼ同じスピードで曲がる、高速スライダーである。

しかし、スタミナがなく先発ができないのが欠点。

バッティング技術は普通である。

主人公に惚れ始めている。

都築 翔太 つづき しょうた 10歳 小学5年 1月12日生まれ

右投左打 捕手

主人公の親友。冷静でどんな場面でも落ち着いて物事を判断する正確。

主人公とは小学3年からの付き合い。捕手としての能力も高く、強肩でキャッチングもよく鋭い洞察力もある。

足が速く1番バッタータイプ。小技もうまい。

村重 むらしげ 大我 たいが 12歳 小学6年 4月7日生まれ

右投右打 一塁手

主人公の1学年上の先輩。

主人公とは小学5年からの付き合い。

夕陽丘バスターズの4番バッター。

都築 つづき 益次郎 ますじろう 37歳

都築翔太の父親。夕陽丘バスターズの監督。

豪快な性格。

第6話：予想以上だ！

桜の木の花びらが散り、新緑の葉に変わった、5月……

ゴールデンウィークの真っ只中、だが、今日は練習の日。

今日から、瑠奈が練習に参加するため、俺は瑠奈と待ち合わせして一緒に学校まで行くことになっていたので、待ち合わせの場所に行く途中だった。

なぜ、待ち合わせまでして一緒に行くのかというと、瑠奈は俺たちとは違う学区の学校出身であったからだ。道理で俺の学校では見かけない子だなと思った。学年は俺と同じ小学五年。これもほとんど予想道理だった。

「てな訳で、待ち合わせ場所に移動中」

「……、誰に言っただ俺は……？」

そんな事をしている内に待ち合わせ場所に到着！

「さあ〜って、瑠奈はいるかな？」

俺は周りを見渡すが瑠奈の姿はどこにもない。

「はあー、遅刻かよ……」

今の時間が9時3分。ちなみに待ち合わせの時間は9時である。完全な遅刻だ。うん……？　そうすると俺も遅刻か？　まあ、いいや。先に来たんだし。

練習の開始時間が10時からだから、まだ余裕があるからいいんだけど。

20分後

「すまん、すまん、遅れてしまった」

瑠奈は20分送れて来たのにもかかわらず、自分には悪気がありませんみたいな笑顔で俺に声をかけてきた。

「すまんじゃないよ！ 20分も遅れて！」

「いやいや、本当にすまなかった。お詫びにそこで買ってきた、スポーツドリンクをあげるから」

そう言つて、冷えたスポーツドリンクを俺にくれた。

「ったく、ゴクツゴクツ……」

文句を言いながらもスポーツドリンクを飲む俺。

いや、勿体無いだろせつかく貰ったんだから。

……何で、1人でノリツコミしてるんだ。うーむ、今日の俺は何か可笑しいな……。

そんなことを頭の中でやっているとう瑠奈が……

「フフッ……こんなやりとりをしていると恋人って感じがするな……」

「ブフツ！！　ゴホツ、ゴホツ……」

とてもとても変な冗談を言ってきた。

「ゴホツ……、お、おい！　いきなり変な事を言っな！　ビククリして吐いちゃったじゃないか！」

「ハハツ！　晃、いいぞ！　そのリアクションを待ってたんだ」

瑠奈は手でお腹を押さえながら笑っていた。

「……もしかして、これをやりたいが為にスポーツドリンクを俺にくれたのか？」

「ああ、晃はウブだと思ったからな。こういう事をすれば、私の予想道理のリアクションをしてくれると思っていたんだが、予想以上のことをしてくれたから、満足、満足」

小悪魔の笑顔で喜んでいる瑠奈。

こいつ……、やってくれるじゃないか。後で覚えてろ、仕返ししてやる。

「ちなみに仕返しをするんだったら、それ相応の覚悟をしてやれよ」

「うっ！」

何で、仕返しするって分かったんだ！？　俺の周りはやっぱり、エスパーだらけだったのか！？

「私はエスパーではないからな」

「ドキッ！」

だから、何で分かったの！？ ヤベエ……、俺もうつ心や頭の中で何もできない……。

「フフッ、晃は顔に出やすいからな。分かりやすくていい」

「えっ、そうだったのか？ 道理で他の奴らにも俺の考えてることが分かったのか。今度から気をつけよ」

「そうだな。ところでいつになったら、学校へ案内してくれるのかな？」

「あっ！ そうだった！ 今、何時だ？」

時間を確認したら、9時半。ここから学校まで15分くらいだから十分間に合うな。

「まだ、間に合う時間だから、行こう」

「ああ、案内頼む」

そんなこんなで学校に向かった。

第7話：恋人！？ライバル！？

無事、瑠奈を学校に案内できた。その後、瑠奈をみんなに紹介するが、その時に……

「小学5年の宇佐美 瑠奈だ。みんなとは違う学区だが、よろしく頼む」

と、普通の自己紹介をしたと思った。しかし、そんな甘い考えを持った俺が間違いだった。

「ちなみにその椿野 晃とは恋人同士なのでその辺もよろしく」

すごい爆弾を投下してきた。

おーい、瑠奈。そんな、嘘をついちや、メッだよ。

すごい爆弾を投下したせいか、俺の思考も爆弾に攻撃され、おかしくなってしまった。

「……」

一瞬みんなの時間が止まった後、

「……えええっつー……」

みんなで一斉に声を出した。

いいねー、みんな息が合ってる。野球のチームプレイでメンバーの息が合ってるって大事だからね。

……って、こんな呑気にしてる場合じゃない！！ みんなに説明しなきゃ！

「みんな、違うんだ！ 瑠奈とはそんな関係じゃない！」

「『『『瑠奈あー！！』『』『』」

ヤベエ……、何か知らないけど、さらにみんなに誤解を与えたみたいだ……。

どうしよう……。どうすれば、みんな分かってくれるんだ……。と、考えていると……

「なんや、晃。恋人がおるなら、おると言ってくれや〜」

たっちゃんがからかい気味に話して来た。

なので、違うと言おうとした時に、

「晃、僕は日和さんが恋人だと思っていたんですが、すでに宇佐美さんという恋人がいましたんですね……。晃、お幸せに」

翔太も訳の分からないことを言いながら、話しかけて来た。って、翔太は俺と千夏のことをそんな風に見てたのかよ。

しかーし！ 断じて違うぞ！ 俺と千夏は恋人なんかじゃない！

……だから、こんな事してる場合じゃないんだ！ みんなにちゃんと説明しないと！

そんなこんなで俺と瑠奈の関係を説明するのに30分くらいの時間を要した。

まあ、みんな最後にはちゃんと納得してくれたからよかったんだけど。

その後、すぐに練習を開始した。

練習後……

「あきちゃん！」

練習が終わった後、千夏が声を掛けて来た。

「ん？ 千夏、練習見に来てたのか？」

「うん、たまたま学校の近く通って、今日練習の日だって思い出したから、見に来ちゃった」

千夏はこうして、時々練習を見学しに来るのだ。

「そっか、じゃあ、一緒に帰るか？」

「うん！」

千夏と一緒に帰ろうとしたのだが……

「晃あ！」

大声で瑠奈が俺を呼びながら近づいてきた。

「どうした、瑠奈？」

「ああ、行きにここまでの道のり案内してもらったが、まだうる覚えだから帰日も案内頼めるか？」

ああ、そういえば行きに案内したっけな。まあ、まだ一回しか通ってない道だからな。しっかりと道順なんて覚えてないか。

「おう、分かった。待ち合わせた場所までいいか？」

「それで十分だ。お願いする」

瑠奈と話していたら……

チヨンチヨン

と、俺の服の裾を千夏が引っ張ってきたので、振り返ると

「あきちゃん……、随分と仲良さそうに話してるけど……、その子は誰かな〜？」

そこには笑顔の般若がいた。

「えっ……、えっと……、千夏さん？ どうかありませんか？」

あまりの恐怖に俺は敬語になってしまった。

「だ・か・ら・そ・の・こ・は・だ・れ！？」

もっと、恐くなったよ。マジでちびりそう……。

「あ、ああ、こいつは……」

かなり、ビビリながらも事情を説明しようとしたら……

「私は晃の恋人だ」

瑠奈が本日2度目の爆弾を投下を開始した。

「……………」

みんなと同じように千夏の時間が一瞬止まった後、

「えええっつー……」

みんなと同じようなリアクションをした。

「ねえ！！ あきちゃんどういうことなの！！ 恋人ってどういうこと！？！？」

大声を叫び、そして、俺の首を絞めながら真意を問いただしてきた。

「ぐっ、ぐるじい。ぐるじいです。ちなづさん……」

「あきちゃん！ あたしは遊びだったの！？」

千夏は混乱しているのか、訳の分からないことを言い始めた。それにしても……。マジキツイデス、チナツサン。

「まあまあ、落ち着きたまえ」

さすがにやばいと思ったのか瑠奈が千夏を止めた。

「すまん、すまん。恋人というのは私の冗談だ」

「えっ……。冗談……？」

千夏は俺の首から手を離しながら呟いた。

「そう、冗談だ」

「まったく、恋人なんてあるわけないだろ。冗談を真に受けるな」

俺は首をさすりながら言った。

「うっ、うっ……。だって、だって……」

「第一、俺のことが好きな奴なんているわけないだろ」

「「……………」」

千夏と瑠奈は黙って啞然とした。

「ん？ どうした、2人とも？」

「「はあ……」」

今度はため息をつき始めた。

何だ、何だ？ 2人ともどうしちゃったんだ？

「もう、いいよ……。それでこの子とは恋人じゃないんだね？」

「ああ」

「じゃあ、紹介してよ」

「そうだな。こいつは宇佐美 瑠奈。この前、偶然に会って野球や
ってるってことだから、今日からチームに入ってもらったんだ」

「へえー、そうだったんだ」

「ああ、んで、瑠奈。俺と今話してるのが、幼馴染の日和 千夏だ」

「うむ。日和さん。よろしく、私のことは瑠奈でいい」

「うん。私も千夏でいいよ。瑠奈さん。」

2人とも握手をしながら、お互い挨拶をした。

「あつ、あと、ちょっとこっちに来てくれないか？」

と、瑠奈は千夏の手をとり、晃から離れていった。

「ん？ どうしたんだ、あいつら？」

晃は何にも分からなそうに呟いた。

晃から離れた2人は……

「どうしたの、瑠奈さん？」

「ああ、単刀直入に聞く。千夏は晃のことが好きなのか？」

「えっ！ あの……、えっと……」

千夏は顔を真っ赤にしながら慌てている。

「どうなんだ？」

「えっと……。うん、好きだよ」

相変わらず、真っ赤な顔で返事をした。

「そうか。やはりな……」

瑠奈は納得しながら頷いた。

「瑠奈さんはどうなの？」

逆に今度は千夏が聞いてきた。

「うつ……。私か、私は……」

瑠奈は少しの間、考えこみ答えてきた。

「私も好きだな」

「そっかあ」

千夏は寂しそうに笑いながら返事をした。
そんな顔を見た瑠奈が、

「千夏、今日から私たちは友達兼ライバルだ」

と、言ってきた。

「えっ？」

いきなりのことでついていけない千夏は返事ができなかった。

「私と千夏は晃のことが好きだけど、互いにその気持ちを相手に譲ることができない。けど、それ以外のことは君とたくさん仲良くなりたい。だから、友達兼ライバルだ。なっ？」

瑠奈は笑顔で千夏に同意を求めてくる。
その提案に千夏は、

「うん！ そうだね！」

瑠奈と同じように笑顔で答えた。

こうして、2人は友達兼ライバルの最高の親友同士となった。

第8話：遊園地へ行っちゃおー！前編

ゴールデンウィーク最終日。

俺と千夏と翔太と瑠奈で遊園地に来ていた。夕陽丘町からかなり離れた場所があるので、電車に乗ってここまでやって来た。

遊園地の名はTDDL（とんでもなく だめ だめ ランド）という、遊園地につけては絶対にダメだろうと思われる名前である。

しかし、名前とは裏腹に客入りは上々で日本一人気の遊園地として家族やカップルには人気のスポットだ。

なぜ、俺達4人がこのTDDLにいるかというと……

前日

まったりと漫画を読んでいた夜に電話が掛かってきた。

「晃。都築君から電話よ」

一階から母さんの呼び出しをくらった。漫画がいい所だったのだが、渋々、一階へ降りてった。

「こんな夜に翔太の奴、何の用だろう？」

電話の受話器を取ると、

「もしもし、夜分遅くに申し訳ありません。晃」

丁寧に謝って来た。

っていうか、親友に対して丁寧すぎるぞ。翔太……。

まあ、今更なんだけどな。

「いやいや、気にするな。それで、どうかしたか？」

「ええ、先日、親戚の叔母からTDDLの1日フリーパス券を4枚頂いたので、

お誘いしに電話しました」

「えっ！？ マジで！？ TDDLって日本で一番人気の遊園地じゃない！ そのフリーパスを4枚くれるなんて気前のいい親戚さんだな。それで、俺と翔太で2枚だから……残りの2枚は？」

「あつ、それは日和さんと宇佐美さんをお誘いしようと思っているのですがどうです？」

「おお、いいんじゃない？」

「そうですか。では、僕は日和さんをお誘いするので兎は宇佐美さんをお誘いしといてください。僕は宇佐美さんの連絡先を知りませんで」

「オッケー。わかった。集合場所と時間は？」

「じゃあ、朝の9時に駅前に集合で」

「了解。じゃあ、また明日な」

「はい。では、また明日に。おやすみなさい」

こういう出来事があったからである。

現在、俺達は遊園地の入り口でどうやってまわろうか相談中である。

「私はこの絶叫エリアという所に行ってみたい」

「そうですね。僕もそのエリアがいいです」

瑠奈と翔太が絶叫エリアに行きたいと言っている。
しかし、俺と千夏は……

「ダメ、ダメ……。メルヘンエリアが絶対にいいに決まってるよ」

「違う、違う！　ここはやっぱり恐怖エリアで涼しくなるーぜー！」

と、俺達は違うエリアに行きたいと思っている。

俺達が言っている、エリアとは……

この遊園地は絶叫エリア・メルヘンエリア・恐怖エリアの3つのエリアに分かれて構成されている。絶叫エリアはジェットコースター

やフリーホールなどの絶叫マシンがある。メルヘンエリアはメリー
ゴランドや観覧車などのアトラクションがある。恐怖のエリアは
お化け屋敷や迷路などのアトラクションがある。

あーだ、こーだと20分近くみんなで議論していると翔太が意見を出した。

「こんな事ばかり話していても一向に行き先エリアが決まりませんのでジャンケンをして行き先エリアを決めましょう」

「そうだな。それなら公平だな」

「うん。勝ってメルヘンエリアに行くよ」

「おっしゃー！ ゼッター勝つぜー！」

みんなが意気込み自分の利き腕を出す。翔太と瑠奈は行き先エリアは同じだから瑠奈が代表してジャンケンをする。

「ジャンケン……」

「ポン！！」

こうして行き先エリアが決まった。

第8話：遊園地へ行っちゃおー！前編（後書き）

更新が何ヶ月も遅れて申し訳ありませんでした。
これからはっきりしていきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273c/>

あの日の夏の約束 ～小学生編～

2010年12月14日22時15分発行